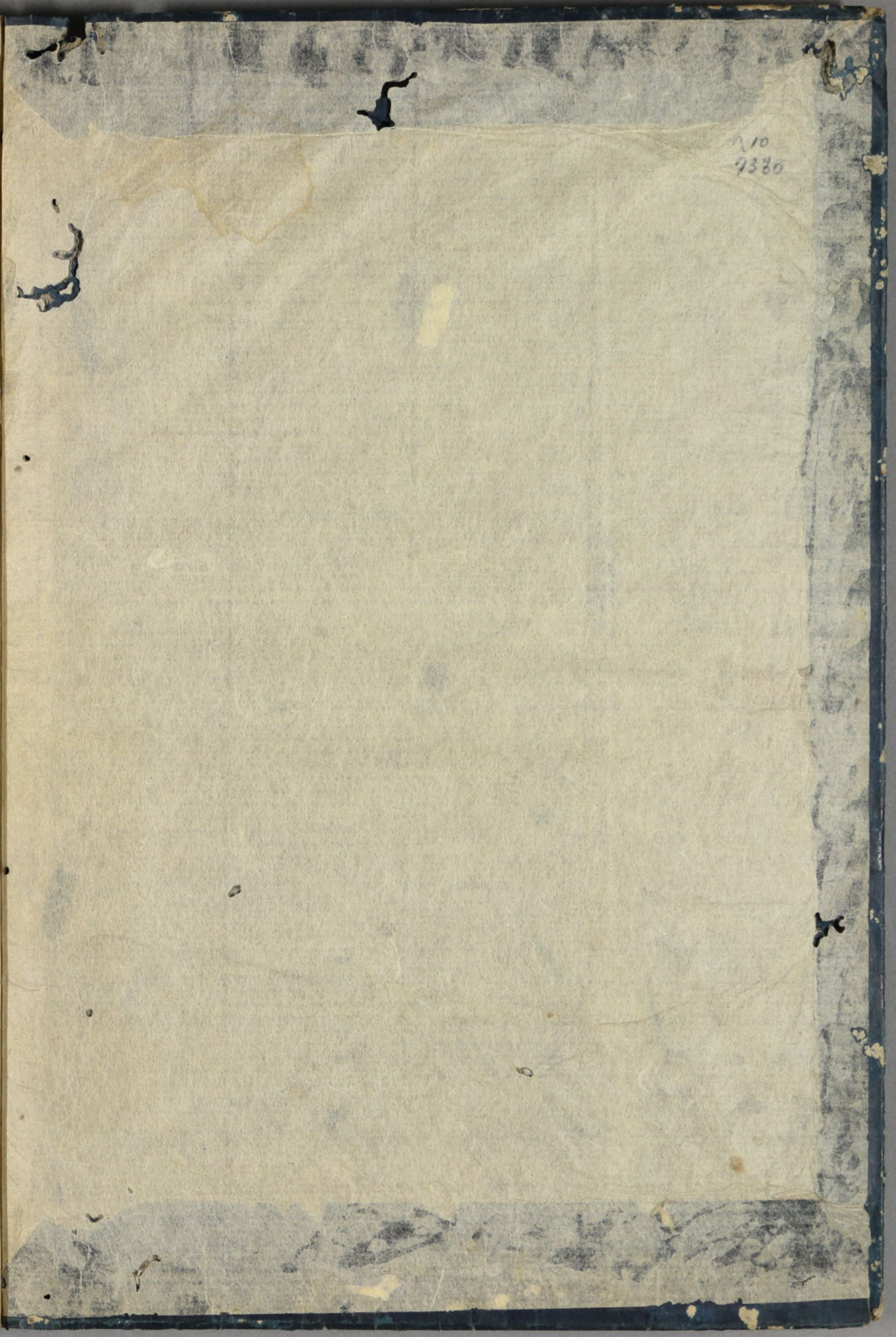
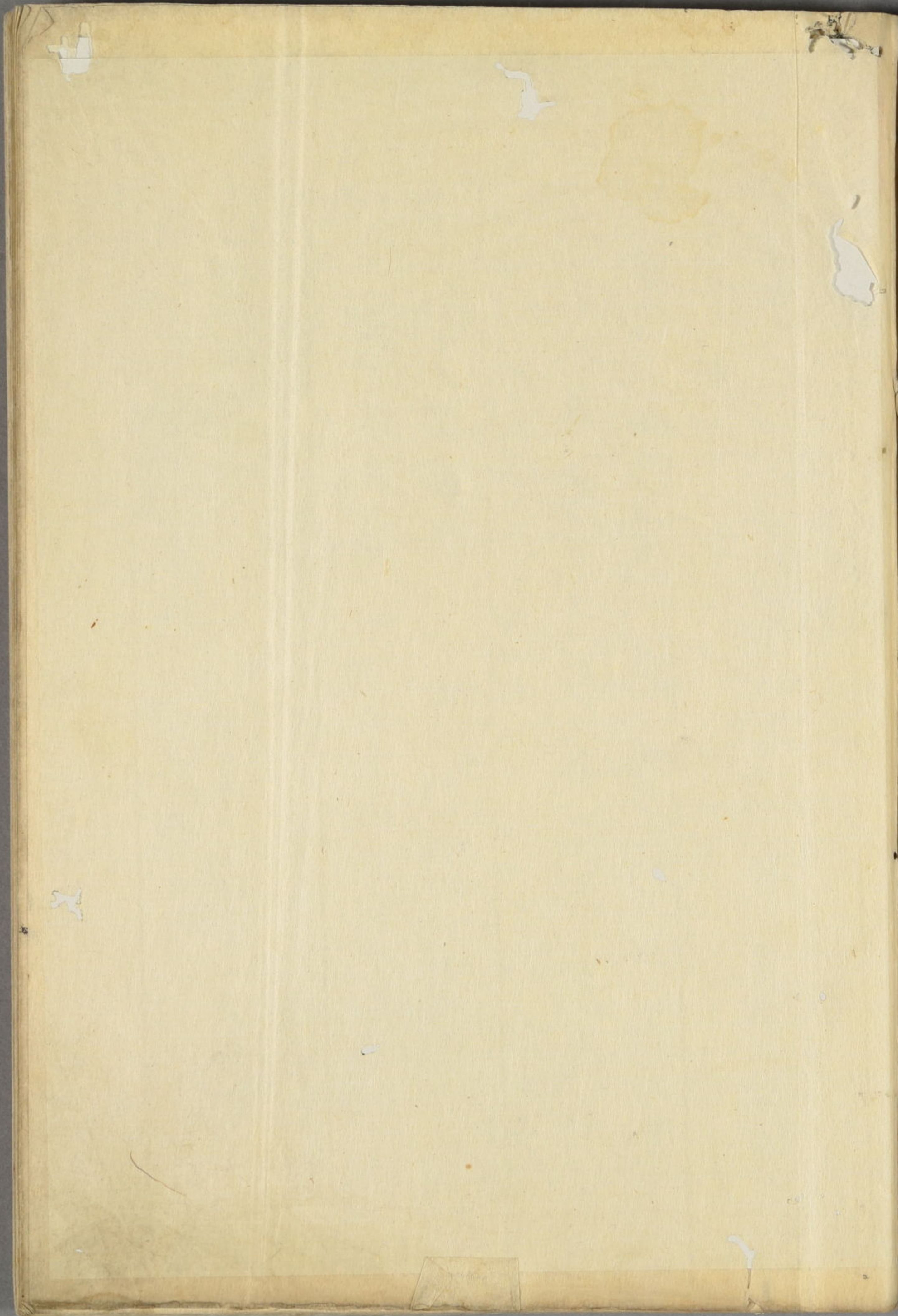




阿佛道記

特別
^ 10
7380







いさよひの日記中書

十六夜此に大納言の家郷の室所佛此作ふ
 お家には後成郷の深定家郷の息之所佛希但馬守
 平廣繁の女之書家門院の衣冠といひし女房
 後には右と定東とわらふぬ所佛の法名之勅撰
 みしお教をかく入るるあふぬお家郷の熱領
 を大納言の家郷といひし是所佛のたは地取の
 といひしお家郷の熱領といひし家督の継かといひし
 志る所佛取のお相郷を世ぬたふと小糸時宗
 執権の比親子といひし録念をとりし所取せられ
 一時的に此日記の事なり

二つに書海をたらしめし事なり

世にたれどもそのやたらぐふたりのたらとありにけり
とぞふたりのいさうたらき家一をうまいたる

中だらしとあるをゆつていつけたるの程とわあを
達の人を招てけるの程とつうわあはて下國家を
はつ中たらとある程の物つき物とじつうつらつめ

さても集たえらぬふたれ一たがうまご二一い
くさうまを世とさくおけたる家いたとい
をわりのくくやあうま

集たえらよと撰集なる家郷の人五十七代後流院の
續後撰集同部代續右今集あまの撰者之書後打
はしき代う勅撰お氏郷うらお世郷お兼郷お世郷

為明卿皆は家の撰進

その流り一もたづさたらとてみるうのたれとて
そりいこふうお相卿お頭卿お守等之けい合
解佛殿のふふ

もらうううの物やぐこをいふるあうりあうま
いづうめいことあま

百のよとあ較のわらよ事へなく友とあゆる物
あうえり縁あり

えらなむときよ子をいこらめ後うをこよとあ
ちさうをいしとよをいし一やとこよとあ
あたいいられ一は

お家郷の代相卿の知行所後全細川のなう

阿闍梨の名を源兼とて續拾遺集の作者之
ころのひのちらのまのりをうりもらんをてきた
きらるる故よのまのひのりゆきまのりらん
やいとて出はる 書付の

ゆとりはらんやまのりんとて詞かひのりた拾
拾はんゆりみりまのり

まのりて旅しりまのり旅衣形かひのり親のまのり
阿闍梨のまのり旅衣三つとてゆきまのり
まのりまのり阿闍梨の信して左のまのり
鎌倉まのりまのりまのりまのりまのりまのり
まのり縁の親のまのりまのり阿闍梨をうりおやまのり
ゆきまのり

唐土のしつはまのりたらちの親のまのりまのりまのり
まのりまのりまのりまのりまのりまのりまのり
ゆきまのりまのりまのりまのりまのりまのり
まのりまのりまのりまのりまのりまのり

まのり

院のまのり院のまのり院のまのり院のまのり
院のまのり院のまのり院のまのり院のまのり
院のまのり院のまのり院のまのり院のまのり

院のまのり院のまのり院のまのり院のまのり
院のまのり院のまのり院のまのり院のまのり
院のまのり院のまのり院のまのり院のまのり

院のまのり院のまのり院のまのり院のまのり
院のまのり院のまのり院のまのり院のまのり

ついでに命をいふ旅のしほあふさうまたあはれ
阿佛も老折のう花をさすきうらぬ古言をいふ
まきいさくくを物とてあつらひにたむしき家
ゆつ唯今の阿佛のふつ二友をまをたあふ
うらふのれいそくもくつうあつらひあふい
たふふふふ作者のふつ
野路のふつふつふつふつふつふつふつ
野路のふつふつふつふつふつふつふつ
右あふふつふつふつふつふつふつ
日なふつふつふつふつふつふつふつ
ふつふつ

ついでに命をいふ旅のしほあふさうまたあはれ
阿佛も老折のう花をさすきうらぬ古言をいふ
まきいさくくを物とてあつらひにたむしき家
ゆつ唯今の阿佛のふつ二友をまをたあふ
うらふのれいそくもくつうあつらひあふい
たふふふふ作者のふつ
野路のふつふつふつふつふつふつふつ
野路のふつふつふつふつふつふつふつ
右あふふつふつふつふつふつふつ
日なふつふつふつふつふつふつふつ
ふつふつ

家々の名の字前の野例の付書一とて家々
とてつと上とて多きなり

はあ井とてあまう及ぶにいらむとて。やとたのみり
からくおなならふてくらじなる

醒井とての谷所は所一はあ井とてあまう
及ぶに井とてあまうとてくらじなる
からくおなならふてくらじなる

やとてあまうとてくらじなる
醒井とての谷所は所一はあ井とてあまう
及ぶに井とてあまうとてくらじなる
からくおなならふてくらじなる
生死長夜ノ夢をいらり又金
とて唯識論

剛經一切有為ノ法ハ如夢幻泡影ノト説リ
先覺も世の夢なり

こをむかひの
希のあはれをそみえ

十八日入つてくらじとて藤川わらうとていさひ
はいきてら

美の谷川谷所はあまう一棋周のまも藤川なる
はあ井とてあまうとてくらじなる
からくおなならふてくらじなる

我子とてあまうとてくらじなる
からくおなならふてくらじなる
からくおなならふてくらじなる
からくおなならふてくらじなる

よきこと

あはれなる御心よきこと
あはれなる御心よきこと

阿闍梨河佛のよきこと

あはれなる御心よきこと

し

よきこと御心よきこと
よきこと御心よきこと
よきこと御心よきこと
よきこと御心よきこと

よきこと御心よきこと

よきこと御心よきこと

よきこと御心よきこと

よきこと御心よきこと

よきこと御心よきこと

よきこと御心よきこと

よきこと御心よきこと

よきこと御心よきこと

よきこと御心よきこと

よきこと御心よきこと

よきこと御心よきこと

よきこと御心よきこと

よきこと御心よきこと

よきこと御心よきこと

初を十六日の曉より計りん

ひつたりりるふ葉のあはしき葉の小枝あり

柘植の小枝あり

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

















お教にお家のよお氏御の才三阿佛のたより別  
賜に控申細云にお教の息女に

お氏奉ゆ別々よふれいおばい

このお家よりお下り喜ぶお家より大宮の院に大  
代後深草院の御母西園寺實成の女常盤并  
の大政大臣

るつらつお下り洗ひおんお家よりお下り

しつらつお下りお家よりお下りお下り

お下りお下り

お下り

思ひお下りお下りお下りお下りお下り  
お下りお下りお下りお下りお下り

お下りお下り

お下りお下りお下りお下りお下り  
お下りお下り

お下りお下りお下りお下りお下り  
此お家冷泉家の元祖に

お下りお下りお下りお下りお下り  
時雨お下りお下りお下りお下りお下り  
旅お下りお下りお下りお下りお下り  
お下りお下りお下り

お下り

お下りお下りお下りお下りお下り  
阿佛のたよりお下りお下りお下りお下り

もろの浦と衣の縁之志らるる元め又雪の如くして  
神の如くは思ひしやのめとて是も始末を讀てか  
つたれり

武乾門院のみろしきとのまきこゆ久我大政大臣  
御のころのまきも續後撰よりうらつまき物といひ  
みろしの集のうらまきとてあはれもいふたまふ人ふ  
世御衣もかたしつて

二度二度の集の中もくもれ但し打中たやまの  
撰集の取先各うた詠をえりやうし撰者の吟味志て  
草分の取の若十りふ十そ宛或は百そ宛詠とらへ  
武乾門院の後高倉院の皇女利子二十八代後城川  
院の御妹へ

御母北白河院殿下とや久我大政食基家云の御女  
うらまき御連のうらまき

さしきふじつと今はらしては思ひおめを御ふ  
又

多敷らるるまきとて世にやはらふは仲は為詠ては  
おめあうらまき一人

今武乾門院の御女とてはらつてひま

安和の院の後高倉院の皇女那子や前武乾門院御妹  
御母同阿佛の皇女とてはらつて一人うらまき  
やうらまきとてはらつて一人女房より撰集おも  
衣御衣とてはらつて一人後集とてはらつて一人  
東海思ひまきとてはらつて一人





今道より神宮へもまた又の御

今日志しとて女二日神宮へ侍りておぼしき御  
ゆめゆめ本心もよもやうもいへりては  
神宮にたりの行幸神宮にたりの御  
ふりしとておぼしき御

久事よりいへりては  
角の御いへりては  
抱ふりしとておぼしき御

神宮にたりの行幸神宮にたりの御  
おぼしき御

峯後之峯ゆりては

おぼしき御  
おぼしき御  
おぼしき御  
おぼしき御

おぼしき御  
おぼしき御  
おぼしき御  
おぼしき御

おぼしき御  
おぼしき御  
おぼしき御  
おぼしき御

おぼしき御  
おぼしき御  
おぼしき御  
おぼしき御

よ

とつれに

舟運の舟く

ふついで海に目撃する

んつゆつと浪に身をまかせ

舟をこぎつゝ

いさよふと

世も

暁ぬらり

く中

阿津

阿津の

おの

の

事

例の

疾

あ

と

あ

あ

あ

阿佛

あ

後地

の

の

の

の

の

浦

の

の

の

の

の

の

の

の

の

中院中将の宮

の

の

の

の

の

の

の

諸君の御覧の如くは、  
りつとて、  
あつたまゝの阿佛の御覧の如くは、  
けいも書院の御覧の如くは、  
いふは、  
たつ

は、  
りつとて、  
あつたまゝの阿佛の御覧の如くは、  
けいも書院の御覧の如くは、  
いふは、  
たつ

あつたまゝの阿佛の御覧の如くは、  
けいも書院の御覧の如くは、  
いふは、  
たつ





前へふしそりなれど阿佛のまじり志りて  
わと真のなるをうらも真をよみそかりまかひは  
阿佛をうしそりなれど阿佛のまじり志りて  
あつたそりなれど阿佛のまじり志りて

うらも真のなるをうらも真をよみそかりまかひは  
阿佛をうしそりなれど阿佛のまじり志りて  
あつたそりなれど阿佛のまじり志りて

あつたそりなれど阿佛のまじり志りて  
あつたそりなれど阿佛のまじり志りて  
あつたそりなれど阿佛のまじり志りて

そりなれど阿佛のまじり志りて

あつたそりなれど阿佛のまじり志りて

あつたそりなれど阿佛のまじり志りて  
あつたそりなれど阿佛のまじり志りて  
あつたそりなれど阿佛のまじり志りて

あつたそりなれど阿佛のまじり志りて

あつたそりなれど阿佛のまじり志りて  
あつたそりなれど阿佛のまじり志りて  
あつたそりなれど阿佛のまじり志りて

あつたそりなれど阿佛のまじり志りて













しもの調う都のりふの葉に旅の枕のよきか  
かのひで羨うそくあつらふ家の人

東海に旅の枕をきしむ旅のりふのよきか  
おのりも旅のりふのよきか

しもの調う都のりふの葉に旅の枕のよきか  
枕遠きし

はくろ旅のりふのよきか  
旅のりふのよきか

しもの調う都のりふの葉に旅の枕のよきか  
とく思ひ

あまのりふのよきか  
おのりも旅のりふのよきか

しもの調う都のりふの葉に旅の枕のよきか  
しもの調う

都のりふのよきか  
しもの調う

志賀の浦のりふのよきか  
しもの調う

しもの調う  
しもの調う

しもの調う  
しもの調う

しもの調う  
しもの調う







かゝるにやいふ事ありては、  
さういふ事ありては、

是も旅のちよと、  
下りての日記なり

日記とあるは、

ふたつに、  
さういふ事ありては、

立別ぬ、  
おらまゝに、

又、

かゝるに、  
さういふ事ありては、

さういふ事ありては、

又、

かゝるに、

秋の、  
さういふ事ありては、

かゝるに、  
さういふ事ありては、

かゝるに、  
さういふ事ありては、

かゝるに、

かゝるに、

かゝるに、

月影の若くはる月影の如く卯のつらふたを  
の糸は月影の如くはる月影の如く卯のつらふたを  
の糸は月影の如くはる月影の如く卯のつらふたを  
の糸は月影の如くはる月影の如く卯のつらふたを  
の糸は月影の如くはる月影の如く卯のつらふたを  
の糸は月影の如くはる月影の如く卯のつらふたを  
の糸は月影の如くはる月影の如く卯のつらふたを  
の糸は月影の如くはる月影の如く卯のつらふたを  
の糸は月影の如くはる月影の如く卯のつらふたを  
の糸は月影の如くはる月影の如く卯のつらふたを

みよこのあともいふ後わかくはるたりゆき書はる  
書はる清濁のまじりあつる  
長秋

又長秋短中之事古来ヨリ先達六今日一如秋

二條家冷泉家ノ分千七百どろたり堀河院御  
百首ヲ召しあつた後頼朝長秋の事と長秋の事と  
獻せらる又五采之品後成郷ノ千載集ヲ撰て  
こも短中とて長秋ヲ載らるる先は京極  
二期ノ遺根付事とて一とて又万葉集  
ハ都千世ノ字ノ前長秋とて長秋の部とて  
所一はふと又拾遺集ハ長秋の部とて  
て人丸若野宮にも長秋とて源順と能宣  
と強言の前とて又二條入左大臣圓融院  
ふも皆長秋長秋とて短中を短中とて  
論は長秋の事始はるの事万葉抄詞林株  
要秋二具之家二委細二変ハ其論

志き流や

大和の由

友路日かノ惣名大和の國も友路あり磯成流よりこ  
け志き流と次の方より大和といはん枕詞

阿波はこれ 天地

いらき初

じうじう

用開のじうじう

岩成初

たのりあき

天の岩戸の日神こめりあ所之面白き日神戸  
より神初の方よりみこり時面白と諸神の宮

しうじう

神系の家集

こいじう

岩戸の前は神系に神系は是より始まるこい

てしと神系うこいひのうに梁を秘抄よりあり

太山に愛媛の山なるゆき本よりうらははる

是神系うこいひのうに山を秘抄よりあり

けいこいひのうに本より神系の本よりあり

山成初

あきと

いさう神代

みら志は

聖代に聖代のる今よりいらきと

荒舞日か少くは延喜天曆の帝代はす

人のを

た福と

万のわと

右今の序よりやゆと

万と万抱た

えのし

たぬ神と

あはれと



先祖御堂園白道長より代々の中め御堂和の  
道通達せしむる一後成卿之始にせしむる中一し  
と後成卿より定家卿お家卿の二代をいつる次志は  
實のくねよとはお家卿よりある

親のよりわき せいとて 親の定家卿

そのはらとて ありとて

定家卿よりお家卿へ譲りてはまゝに流すも  
但人のまゝいふ所をお家卿の子息とてまゝ親の  
わきといふはお家卿よりある

思ひのや 志のなる 早下ノ初

そのより本此 せむらう 大御前

こうとてや

く本のみ母はのこをたうとの系は法の若所より  
母といひてその膝よりきこ

世の流はよ いまのよ 帝の御奉

身はたきま 終りま

幼米のらう

次まの心 流はる 播磨の國より

細川山の 名はり

細川の老代、此知行所之橋とて持付出ノ場有

わはふ余 わけいとて

余はからう、故實ありては細川おはひといふ  
ふかき事

ほいしとて みるこ





いさしうを礼寸折言えよしつてあしむらうきたる  
まうやまやまよ何處もいしたるいさしういさしけたる  
初いさしういさしう

みたりわらうまき ともきの代め あさひらなま

なうぬとら いまをまき一故 わとまきは

あさひらなまの 朝廷の政はけしつてうへ麻あういさあ

郵一とく是字泰旺のあり

在の仲あさしはの 加めさういさしうのまらういさしうして

けあはれの新勅撰新の二題不知平泰時と何の勢うま

いさあ郵あうまよみ秋身也秋成りもよとよと入春り

けう蓬まよのつとよあさしうとあしうのま世の中は

麻治まよのつとよあさしうの蓬まよ世の中はあしうのま

とく

いさあまき 何の詠り けあまき

いさあまき 身をわらうまき たんじま

いさあまき けあまきは

何いこれらうたしつてあまき

いさあまき わらうまき けあまき

わらうまき

長いさしうのまよいさしうのまよいさしうのまよいさしうのまよ

けあまきいさしうのまよいさしうのまよいさしうのまよ

わらうまきいさしうのまよいさしうのまよ

いさしうのまよいさしうのまよ

いさしうのまよ

いさしうのまよ





この新勅撰へ入て坊り

永仁六年三月一日書之

永仁九十二代伏見院の年号

石阿佛房より人定家卿の御家卿の御家卿  
又人定よりより権左の國細川の店とお家より  
譲えらるるをとお代他殿よりより押領せら  
せしと之祈禱のお鎌倉へ阿佛房下ら進出りし  
し時よりよりよりよりよりよりよりよりよりより  
ととお代しよりよりよりよりよりよりよりよりより  
人よりよりよりよりよりよりよりよりよりよりより  
おのりよりよりよりよりよりよりよりよりよりより  
Pへにお相の如し

石阿佛房よりよりよりよりよりよりよりよりより  
祈人の御家卿よりよりよりよりよりよりよりよりより  
書之お書よりよりよりよりよりよりよりよりより















る家以て家一と名ヲ執覚らるり如くもく  
みつと法華經一

十方佛土中唯有一乘法一無二亦無三矣

曰くは法華を法としらるる二百十部

書よ向ひてよじを讀ト云フ其らめ唱ふるを

誦と云ふ之を家め或は百十部と云ふは法華經

の題目を度るなり

やまひつと今この法をぞしやよと故念一にふ

力はありきつるなり

しと之際と此世はわんとしる今之流めおく

と臨流正念一

心をひらめて流りみるまはりしかた

一心不亂一臨流一

つとつと花のまはたしをらつとつとつとつと

らつとつとつとつとつとつとつとつとつと

つとつとつとつとつとつとつとつとつと

蓮華をる家以て成仏ノ身はしるも是れつとつと

つとつとつとつとつとつと

つとつとつとつとつとつとつとつとつと

宇土涌波沖ノ名所之跡きとつと初之新初撰念

一四相摸

つとつとつとつとつとつとつとつとつと

新古今恋

つとつとつとつとつとつと

つとつとつとつとつとつとつとつとつと

わらわらちりりいひのさむらひ

紀別表ノ浦ナリノ道ナリノ道ナリ

いふるえいひひひん入 ぬめりし

ぬめりしとてかこひてをいふる

いふるえいひひひん入 ぬめりし

いふるえいひひひん入 ぬめりし

昔の金の餅の塩がもろのいふる

ふもるの茶のいふる

いふるえいひひひん入 ぬめりし

いふるえいひひひん入 ぬめりし

いふるえいひひひん入 ぬめりし

いふるえいひひひん入 ぬめりし

いふるえいひひひん入 ぬめりし

いふるえいひひひん入 ぬめりし

いふるえいひひひん入 ぬめりし

いふるえいひひひん入 ぬめりし

いふるえいひひひん入 ぬめりし

いふるえいひひひん入 ぬめりし

いふるえいひひひん入 ぬめりし

いふるえいひひひん入 ぬめりし

いふるえいひひひん入 ぬめりし

いふるえいひひひん入 ぬめりし

いふるえいひひひん入 ぬめりし

いふるえいひひひん入 ぬめりし

霜と君とけりうーけきてもうんやまう命をた  
わ

気候を四季の轉変をいして世のはつゆのあま  
をみとらう古今集の序

春のあつたむねむねちりそみ 秋の夕言く木葉繁  
のれつるをむわわの年こも積の靴くぬ雪  
と波とをまけさるの露の泥をみてわつ力を  
たせらる

け席をあらうとんを用いしてうせーん  
息乃いんむね

朝の離れのうーをがうらうをてあし今  
いあつとあるあをまいこいよとて法をうけ  
をそしんて  
八袖

たよー運のうーをらうらう

夫婦の二世の宿執ヲ兼く一運宅主を執る  
んものやせーとらうはまう

未の病ちるあやせの仲をくはらうあうあ  
けらうーかあせよー

かの次をたごころをばせさうせんあうあ  
あ

あ婦の幼果にげらうひー幼果のんく一運宅よ  
折言

欲きあうら後の本とてあああああああ

なるををうみしむと

お家の上世の時をばくきりーしんいふて  
あゝいふるをよみわたりしんせいのりあつて  
うーいふる若物としてけんきうぶのいひるめ  
とあらぬらとばいふーと

乞ひ涙はあひのをー

仲もあつたつとーいふきけしんぞかかるとつてな  
うばーいふとわがーいふて

とありけつ初はうつひいふもあつぬと阿佛  
うーいふはあつとけつ初と誠ー去深にい  
なよき抱く

結ひ起しぬ見のあつとつて六件め思ふる若くは

けあめーいふてー葵のをうーいふ見とつて葵ノ  
上の清よみあつたつていふ部つ子抱つて阿佛と  
きんばらあつとつていふあつとつていふ  
とつていふつ初あつたつての度とつてわがーいふをえ  
去作者のきんばらあつとつていふ

衣の露はあつとつていふ

帯ーいふ衣の露のよみ抱つて純ノ中ーいふ  
いふ詩のあつ

いふはあつとつていふ  
てまういふいふあつとつて

蓮華を軽にもつたつていふ

あつとつていふあつとつていふ

憊罪主善也是をいふの如く是も是も  
相なりとていふ

そよの自ぬぢわつらぬいさる地苑りつ一所のまを  
をむさあらししとて使つる法を浄き部

ふのそ高なる家なる目なる一地この目よ地苑  
井の縁目なるいさるなる一法も浄き部  
と地苑井の像を一所法を浄めてかきりとて  
萬九の二百八十余なる一

云量義經普賢經付法苑珠林のまをいふは  
かきざいなるわつらぬ一  
たも一とて是を法苑漢譯して  
法養といふに之を漢譯するをいふ漢譯のやあな

けくそを教ふるもら

け功德をよそ入る大細言のまをいふは  
世の善をよそいふもらなるまをいふは  
のまをいふもらなるまをいふは

け功德といふの法苑經又三經なる菩提の梵語  
佛の智慧にけ佛のまをいふ道す  
仏いふく功德法といふ浄の命といふは  
いさる浄なるからしてわつらぬも利益なる  
わ

利益といふ佛の衆生を佛意めするまをいふは  
わつらぬといふ衆生といふまをいふは

け道回つるまをいふは衆生をいふは

そつとらんとし

そつとらんとしとていふは界一とていふ衆生と

釋一訂衍論ニ衆生有王者なること

りてんといふ衆生洲度のみてあつて海をわくと

つらるるいけい通而法界一のあま祿くと法華

經三ノ卷北城偷品一

願々此功德普及於一切我興衆生皆具成

佛道一

け文ヲ以テ決定せしむ

こほを身にあつていふ事あるらうもいふ事あるらう

建治元年六月五日

才子敬白

こほの身とて神佛の身とていふこといふらういふは

たつてこほの身にあつていふ事あるらう

のりけんとていふこといふ事あるらう

建治元年ヨリ寛文十二年一〇九四百年次

け年号の第一道ノ記ヨリ大二年第一爲家

の道長次

兼道心池本校

1  
經年高老受經

